

発行日 平成25年7月3日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 \* ミラノ在住

## ミラノ・サローネ国際家具見本市 「ミラノ、明日のインテリアデザイン」

4月9日から14日までの6日間、ミラノ・ロー国際展示会場にて、第52回ミラノ・サローネ国際見本市(以下、ミラノ・サローネ)が開催された。

昨年11月7日、2008年より社長を務められたCarlo Guglielmi前社長に代わり、ミラノ・サローネ運営会社であるCOSMIT社の新社長としてClaudio Luti氏が任命された。Luti氏は、国際的家具メーカーKartel社の会長でもあり、彼の優れたビジネス力や豊富なデザイン知識は、今後のミラノ・サローネの発展に大きく生かされると期待されている。

イタリア家具工業連盟の子会社としてイタリア家具の国内外での振興を担っているCOSMIT社であるが、新社長の意向により、今年よりCOSMIT社が主催するミラノ・サローネ国際家具見本市と市内各地で行なわれるフォーリ・サローネとの境界線を明確にすることを関係者各位に依頼した。年々規模が大きくなるとともに、焦点が曖昧になりがちな国際的デザインイベントの中で、彼らの位置づけを今一度明確にさせようという意図が感じられる。

ミラノ・サローネ開催に先立ち、2月7日にはCOSMIT主催により第52回ミラノ・サローネ国際家具見本市の記者発表が行なわれた。会場となったのは、再開発の進むガリバルディ地区に建設された高層ビルUnicredit銀行の7階。会場からは、昨年逝去した女性建築家Gae Aulentiの名が付けられた竣工したばかりの広場や、ミラノ大聖堂、アルプスの山々などが見渡せ、清涼かつ軽快な空気の中で記者発表は進められた。

会場へは、主催者であるCOSMIT社の役員に加え、ゲストとして、ミラノ市長Giuliano Pisapia、建築家Antonio Citterio、デザイナーPatricia Urquiola、建築家Piero Lissoni、ミラノ市文化評議員でもある建築家Stefano Boeriが招かれた。以上の豪華ゲストに加え、さらに特別ゲストとして、Salone Ufficioで開催されたProgetto: Ufficio da abitare(暮らしの中のオフィス・プロジェクト)の総指揮を務めたフランス人建築家Jean Nouvelも招かれるという、たいへん華やかな記者発表であった。

ミラノ・サローネに向ける想いや期待は各人によって異なるが、皆が共通して持っているのは、歴史のあるミラノの街がデザイン力によりさらに質の高い「美」を創り出していくであろうという期待感である。

また、ビジネスの面から捉えたミラノ・サローネには、現在、イタリア製品の世界マーケット拡大に伴うコピー商品の問題などの課題もあり、例えば、ここ数年ミラノ・サローネへの来場者が急激に増加しているBRICs諸国(ブラジル、ロシア、インド、中国)との対話の必要性も、この記者発表内で浮き彫りにされた。



COSMIT社の社長に就任されたClaudio Luti氏。



2月7日に行なわれた記者発表会の様子。



第52回ミラノ・サローネへの抱負を語る役員たち。



ミラノ・サローネのPRビデオのリンク:  
[www.youtube.com/watch?feature=player\\_embedded&v=Yxqw7iQx\\_A](http://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=Yxqw7iQx_A)

ミラノ・ロー国際展示会場敷地内(展示総面積53万平米、実質展示面積約21万平米)では、第52回Salone Internazionale del Mobile、第27回 Salone Internazionale del Complemento d'Arredo、第27回 EuroLuce、第16回 Salone Ufficioおよび、第16回 SaloneSatelliteが開催された。

昨年度の参加総数2580社に対し減少したものの、出展社総数2015社(出展社数内訳:Salone Internazionale del Mobile 1440社、EuroLuce 479社、Salone Ufficio 106社、SaloneSatellite デザイナー700名-17校)が集い、今後のインテリアデザインの多角的な方向性を示した。

又、参加国数は160ヶ国、来場者総数は32万4093人(内28万5698人が業界関係者)に達し、その内の68%(前年比5.9%増)は国外からの来場者である。前回のEuroLuceが併催された2011年に比べ3500人の増加となっている。

## 暮らすためのオフィス - Progetto : Ufficio da abitare

展示会場内では、今年のテーマの1つである「オフィス」に関するコンファレンスやイベントが開催されたが、大きな注目を浴びたのは、Jean Nouvelが企画した「Progetto: Ufficio da abitare(暮らしの中のオフィス)」である。Salone Ufficioが催された24号館パビリオンの内部に1200平米の敷地を設置し、オリジナリティに欠けるスタンダードな従来のオフィスを捨て、新しい方向性へと導く空間コンセプトの提案が紹介された。

Jean Nouvelは、プロジェクトの制作にあたり「『生活の喜びへの概念』が、私がこのプロジェクトにおいて喚起したいテーマ。自宅よりオフィスで過ごす時間が長いということはめずらしいことではなく、つまり、働くことは生活することでもある。」と、宣言した。

ミステリアスな黒い箱の巨大なブース中央には、4つの大型スクリーンが設置され、ファッションデザイナーAgnèsB、写真家Elliot Erwitt、アーティストMichelangelo Pistoletto、映画監督Alain Fleischerが仕事観について語るビデオが、それぞれ投影された。

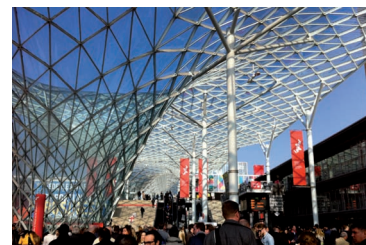
この中央の広場を囲むように、現状のオフィス環境が過去のスタイルであることを示唆する、新しいコンセプトのオフィスが5つ提案された。

最初の提案は、ミラノ中心地にいまだに保存されている歴史的建造物内のマンションに想定されたオフィス。リビングルーム、キッチン、暖炉や床材など、インテリアのすべてが建築当時のままに保存されている。家具は、オリジナル建築とハーモニーを保ち、温かいアットホームな雰囲気の中で仕事環境を創り出すことができる。

2つ目の提案は、近年支持され続けている傾向として、自宅とオフィスを兼ねた空間。日中はオフィスとして、夜と休日には自宅として使われるこの1つの空間では、セレクトされた家具や備品などが仕事とオフ時間の両方で活用される。

3つ目の提案は、オープンスペース。この空間では、モジュール家具を組み合わせてたり、切り離したり、自在に配置することによって、動きのある空間を創り出すことができる。

4つ目の提案は、世界のどこにでも存在するであろう街の郊外にある工場内をオフィスとして利用した空間。この種類の空間は、通常、内部には何もないため、たいへん自由な発想で空間作りをすることができる。



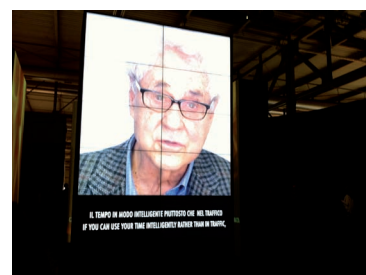
ロー展示会場の入り口は、例年以上に溢れんばかりの入場者で埋め尽くされていた。



ジャーナリストの受付を行なう西口には、モバイルやタブレットの利用をPRするパネルが並ぶ。



ブース内の中央に設置されたスクリーンに投影されたビデオインタビュー。



写真家Elliot Erwittが語る仕事観。



歴史的なマンションをオフィスとして使用した、温かくアットホームな空間。



工場跡を利用した、自由なオフィス空間の提案。

最後の提案は、現在使われているスタンダードなオフィス空間に工夫を加え、これまでよりも快適で、居心地のよい空間と変化させるいくつかのアイデア。例えば、プライバシーを守る為の間仕切りにブラインドを取り付けたり、ガラスの表面に装飾を加えたり、これらの繊細な仕上げを加えることにより、ハイテクなスタイルをベースに、高級感のあるオフィスを創り出すことができる。

これら5つの空間の間を縫うように、照明をテーマとした展示空間が設けられた。労働環境のパーソナライズを更に可能とするエレメントとして、未発表の実験的な照明器具が紹介された。

また、別の空間では、Jean Nouvel自身が、巨匠たちへのオマージュとしてセレクトしたオフィス家具の作品集が展示された。過去にデザインされた卓越した、また現代でも新鮮に感じられるオフィス家具は、使用された当時の写真と共に紹介された。

これらのすべての展示の中で、個人的に興味深く立ち止まって見たのは、Vip Loungeで放映されたインタビューである。Ron Arad、Michele De Lucchi、Marc Newson、Philippe Starckと、世界的に活躍する4人のクリエイターが、彼ら自身の仕事場で仕事に対する姿勢や、視点、また仕事に必要な環境や条件などについて淡々と語る様子は、市場で販売される彼らの作品からは想像できない刺激的な内容であった。

## サローネ・サテリテ

第16回サローネ・サテリテのテーマは、「産業のためのクラフツマンシップとデザイン」。現代の若手デザイナーたちが、クラフツマンシップの伝統と近代産業の融合の必要性を強く感じていることから、今回このテーマが選ばれた。

パビリオン22/24号館内には、今回の特別展示として、メインブースの周辺に木工、鉄工、ガラス工芸などの手で物を作る現場がシミュレーションされた。

700人が参加するブースをくまなく見て回ったが、力強いデザイン工芸作品も多く発表されており、デザインと工芸の妙なる融合がたいへん新鮮であった。これまでの工芸の持つ古臭いイメージを超越して、手の温もりを残しつつも洗練された外見からは、デザインの新しい方向性が示されている、と感じ、胸が躍る気分であった。

今回で5回目を迎えるサテリテ・アワードは、隔年開催見本市に準じたテーマが対象となり、よって今年にはオフィス家具と照明器具が取り上げられた。

大賞には、ミラノで活動しているポルトガル人のTania Da Cruzが制作した、コルク材から作られた防音パネル「BRAQUE」が選ばれた。モジュールパネルとして制作され、空間にあわせてサイズが自由に変化でき、天然素材は洗練された幾何学模様デザインされ、オフィス空間へ柔軟に対応できる。

2等には、エジプトから参加したデザイン・グループRe Design Studioが制作した「PLASTEX」。エジプトの伝統的な織り工芸の手法を用いて、古い綿布にプラスチック製の袋を織り込んだ新しい生地を開発し、これらの生地をスツールやインテリア小物などに応用した作品。

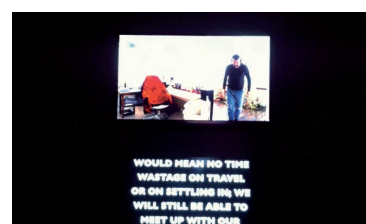
3等には、台湾人Hanhsi Chenが主宰するPoetic Labが制作した照明器具「WAVE」。ガラスと光、反射パネルの3点から構成される照明器具だが、壁に映し出される光と影の模様は、反射パネルの動きによって変化する。



実験的な照明器具が展示された空間。



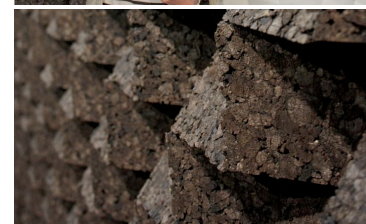
デザインの歴史に残るオフィス家具は、当時の写真と共に展示された。



自宅兼オフィスで創作活動を行なうフィリップ・スタルクのビデオ・インタビュー。



手作りの現場をシミュレーションした特別展示ブース。



サテリテ・アワード大賞を獲得したTania Da Cruzと受賞作品BRAQUEのディテール。



サテリテ・アワード2等を受賞した、エジプトのデザイングループ、Re Design Studio制作の「PLA-STEX」。



同じく Re Design Studioが、エジプトの伝統幾何学パターンを用いて制作したタペストリーと家具。



日本から参加した117(石川知里主宰)の作品。手編みのガラスカバーが、空気を温かくさせる。  
リンク [www.117ichiichinana.com](http://www.117ichiichinana.com)



サテリテ・アワード3等を受賞したPoetic Lab制作の照明器具「WAVE」。  
リンク [www.poetic-lab.com](http://www.poetic-lab.com)



オランダ人Robert Van Embricqsは、木材と金属製蝶番を巧みに使い、平面を立体へ変化させる家具デザインを展示。  
リンク [www.robertvanembricqs.com](http://www.robertvanembricqs.com)



東京芸大で陶芸を学んだウクライナ出身のMaria Volokhovaの作品は、デザインとしての実用性を持ちながら、物としての存在感を強く感じさせる。  
リンク [www.volokhova.com](http://www.volokhova.com)



Markus Johansson Studioは、誰もが使える日常品を、クラフトワークを介してデザインすることを目指している。  
リンク [markusjohansson.com](http://markusjohansson.com)



フランス人デザイナーFiona Krugerの作品。写真から幾何学パターンを起こし、テキスタイルや照明器具のグラフィックとして応用。  
リンク [www.fionakruger.com](http://www.fionakruger.com)



サテリテ・アワードへの出展作品の展示。



ヴェネチアの街へのオマージュとして生み出されたコレクション「Acqua Alta」。運河に面したファサードに残される緑の藻を、伝統的な織物にリメイクした作品。



イタリア人Giorgio Bonaguroとプエルトリコ人Eddie Figueroaのユニットのデザインは、木やガラスの素材の美しさが存分に生かされている。

## フォーリ・サローネ

今年のサローネ・サテリテのテーマに呼応するかのよう、フォーリ・サローネでも、デザイン工芸に関する展示が数多く見られた。

ミラノ・トリエンナーレでは、Triennale Design Weekと題して6日間、計29の展示と、隣接するシアターで5つのイベントが開催された。イタリアンデザインの本拠地だけに、それぞれの展示は例年以上に興味深いものであった。

その中でも、オリジナリティが高く、特に印象に残った展示を紹介したい。

まず、新素材をプロモートする団体Material Connexionのスペース内では、日本人デザイナー伊藤節、志信のキュレーションによる「FROTTAGE-NATURAL STORY」が開催された。日本古来の自然に対する考えをメッセージとし、可もなく不可もなく自然素材それぞれが持つ固有の美しさを、巧みにデザインした家具や照明器具などが発表された。

もう一つクラフトの領域で印象的だったのは、エルメスやDePadovaなど世界中の一流ブランドから木工の巨匠として知られているPierluigi Ghiandaの作品の紹介である。展示された作品はどの方向から見ても表面が美しく、部位の継ぎ目がまるで1つのかたまりのようにたいへん滑らかである。それぞれの使用目的に応じて最適な木材を選び、木をいじめない為に継ぎには一切釘を使わず、素材を愛でながらひとつの形に仕上げる彼の職人としての姿勢には、世界中から多大な信用と評価が寄せられている。

刑務所生活をヒントにしたインテリアの提案は興味深い展示であった。2003年よりイタリア中部地方のスポレート市の刑務所の入所者に向けてデザイン分野の職業訓練を行なう団体Comodoと、Aldo Cibicらの建築デザイン事務所が共同でプロジェクトした「Freedom Room」。この刑務所では、誰もが工夫を凝らし、9平米(3mx3m)のスペースをリビングルーム、寝室、キッチン、スポーツジムとして多様に使わざるを得ない。また、室内にある備品もしばしば使用目的以外の目的で使用される。このように使用可能なスペースと物品が限られている環境からヒントを得てプロジェクトはスタートした。職業訓練を受けた入所者が、このプロジェクトではコンサルタントとして参加し、「少ないものとの生活」をコンセプトに、9平米を最大限に活用しかつ快適に過ごすためのインテリアを提案した。このインテリアプランは、例えば、ユースホステルの一室として応用したり、広いロフトなどのスペースの中でプライベートを確保する為に独立した空間として使用するなど、多様な可能性を秘めている。

今年で第3回目となるRCS出版社グループ主催のMeet Designは、ミラノに始まり世界7カ国(サンパオロ、ニューヨーク、ウィーン、北京、東京、パリ、メルボルン)を旅する「Around the World」をテーマに、グローバルにライフスタイルを提案する大規模な展示を展開した。イタリアンデザインがこれまで培ってきた、コンセプトから実現に至るまでのプロセスごとの価値観を介して、「イタリアの住まいの文化」を語ることが目的である。言い換えれば、イタリア製品は世界のどの主要都市のライフスタイルも十分に表現できる能力を持っている、という事実をアピールしたといえる。

トリエンナーレの2階の一角では、ハンス・ウェグナーがデザインした椅子の展示に伴って、座の部分の製作の実演が行なわれた。座は、スエーデンの森林だけから作られる紙製のひもが使われており、1脚の椅子を仕上げるには、120mのひもと1時間の作業時間が必要とされる。



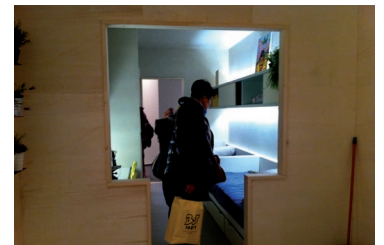
トリエンナーレ・デザイン・ウィーク開催期間中に展示されるエキシビジョンの幟が風になびくエントランス。



伊藤節、志信とOmniDecorのコラボレーションによるガラスのインスタレーション。木々の間を通過した太陽光が、流れる水面に反射する様を表現。



木工工房の写真と共に、Bottega Pierluigi Ghiandaの名作が並ぶ展示室。



寝室、リビングルーム、シャワールーム、キッチン、ストーディオなど、生活に必要なすべての用途を兼ね備える、魔法のような9平米のスペース。



RCS主催のMeet Design-「Around the world」では、世界の7つの主要都市の現代ライフスタイルが、すべてイタリア製品によって表現された。



職人がひもの巻き方を実演してみせる。

ミラノ市中心部とトルトーナ地区の中間辺りに位置するCascina Cuccagna(クッカーニャ酪農家)は、1695年代に建設され、2000平米の建物内部と中庭から成り立っている。1984年以降ミラノ市の所有となり、2008年に改築が着工された後に、多数のアソシエーションの共同運営により、現在は都会のオアシスとして機能している。年間を通して、自然食品の販売とレストラン、小規模の宿泊施設の提供、コンファレンスルームの提供、ワークショップなど、地域社会と密接なリレーションシップを築く活動を行なっている。

数年前からフォーリ・サローネの新しい拠点として注目を集めているスペースだが、今年は「GOODDESIGN2013 - 楽しく働き、より良く暮らす」と題し、環境支援とエコロジーをコンセプトにしたプロジェクトだけをセレクトした。「デザイン」は、環境保護に対する意識を高めるツールとして最適であるとし、敷地内を存分に使い計36の模範例を紹介した。

中庭には、Paolo Ulianのインスタレーション「L'ESSENZA E L'ECCESSO(本質と過剰)」が展示され、現代社会で疑問を持たずに消費される日用品の無駄なものを排除しようと、メッセージを投げかけた。例えば、使い捨ての食器類とガラス製のグラス、電動式と手動式のチーズおろし機、電池で動くおもちゃと木製のおもちゃなどを対として陳列することで、今一度、日常を考え直すことを促した。

屋内の展示の中で興味を引いたのは、Laboratorio Grasseが工房で1つ1つ手作りで製作したインテリアパーツである。空間の中に占める割合は小さくても存在感の大きな、スイッチや照明器具、スピーカーなどを、丁寧に洗練したデザインに仕上げたコレクションである。

また、ミラノ北部、スイスとの国境に位置するヴァレーゼ市から参加したアソシエーションは、市内に点在する繊維工場や町工場などから廃材を集め倉庫に保存し、これらの材料を活用して子供たち対象のワークショップを随時行なっている。今回の展示では、これらの素材が本来の機能とは異なる方法で活用する様子を実演して見せた。例えば、繊維工場で次々に廃材となるプラスチック製のボビンが表面の凹凸や穴自体が図柄として面白く、ローラーとしてインクをつければ簡単に子供の工作の道具として使えるなど。ヴァレーゼの町全体が1つになって、遊びの中から子供たちのエコロジー意識を高めるという興味深いプロジェクトである。

アブルツォ州で活動するArago Designは、セラミックを専門にデザインするデザインユニット。デザインのモチーフには、アブルツォの特産品のビスケットやアブルツォにある山脈の形など、土地にまつわる形態が引用されている。製品はすべて地域の職人の手によって作られ、土地の活性化に貢献している。

すでにフォーリ・サローネのメイン会場の1つとして定着しているFABRICA DEL VAPOREで、「石巻工房」の展示に出会った。ミラノ・サローネ開幕直前に展示できることが決まり、数日前に展示作品が送られてきたとのこと。石巻工房のプロジェクトが紹介されるのはイタリアでは今回初めてである。震災の多いこの国で、石巻工房の活動と作品を多くの人に見てもらい、震災時、震災後に有用なデザインとして石巻工房のコンセプトを少しでも浸透させたい、という意向から、木製のツール、長椅子、テーブルなど解体可能で持ち運びが楽な家具類が展示された。



中庭から見た、Cascina Cuccagnaの展示風景。



インスタレーション「L'ESSENZA E L'ECCESSO」の題材となった日用品が並ぶ。



Laboratorio Grasseが製作する、インテリアパーツ



繊維工場の廃棄物であるボビンを子供たちの工作の道具として再利用している。



アブルツォの特産品のビスケットを形どったプレートと、山脈を形どった花瓶。どの作品もオリジナル性に溢れている。  
リンク  
[www.aragodesign.it](http://www.aragodesign.it)



石巻工房の活動の様子を紹介する写真と共に展示された作品。

トルトーナ地区では、Toshiba Lightingの特別協賛により、IXIがデザインし、岡安泉がライティング・デザインをてがけた、光のインスタレーション「SOFFIO」が公開された。「SOFFIO」とは、イタリア語で「呼吸、息吹」を意味する。騒々しい外部とは対照的な静寂で真っ暗な空間内部で、無数に点在するLED光源がゆっくりと輝度を増していき、そしてゆっくりと消えていく。1つのエネルギーの大切さと、それが生み出す心地よさを体感するインスタレーションである。

今年のミラノ・サローネそしてフォーリ・サローネは、私たちにたくさんの夢を見せてくれた。見ているだけで心が温まったり躍ったり、景気停滞とは全く無縁な天上の空間の数々であった。



「SOFFIO」の会場エントランス。

## 執筆者 略歴

### 池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランツィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆 (FAG出版社より)

(イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本)

“B.A.C.”展 (City Art ギャラリー) にて、インスタレーション”Ma.Ma.Ma” を発表

“Made in Bovisa”(Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト)を起案、コーディネイト

現在はクリエイティブ・コンサルティング会社 (デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン) の共同経営者として活動しながら、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳に携わっている